The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第3ホローの住民運動と「ジェンダーセンター」2007
Author(s)	今岡, 良子
Citation	モンゴル研究. 2007, 24, p. 56-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102332
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

《調査報告》

第３ホローの住民運動と「ジェンダーセンター」2007

今　岡　良　子

（1）「ジェンダーセンター」と第３ホロー

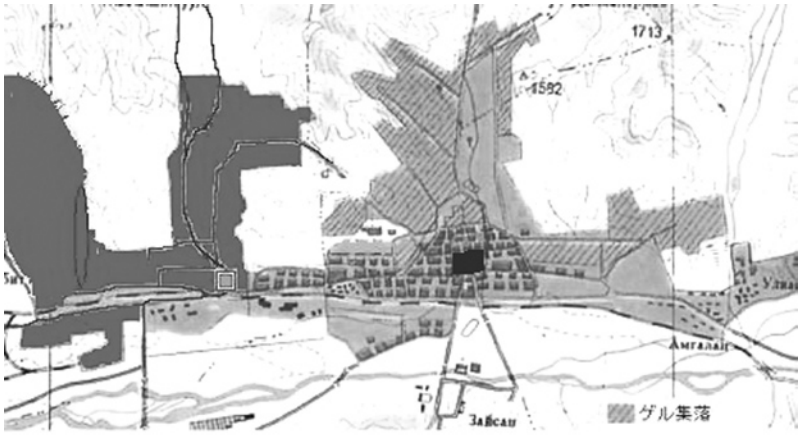
この報告では、ウランバートルの西の端で、ＮＧＯと住民が自律的な地域づくりを始めていることを紹介したい。

私は、2004年にモンゴル国におけるジェンダー研究の現状についてまとめるため、文献を収集していた[1)]。その中でも、セックスワーカーの少女から聞き取りを行ない、報告書をまとめた女性情報センターに興味をもった。いったい、どのような人たちが、このような難しい調査を可能にしたのか、実際に会ってみたいと思った。

訪ねてみると、女性情報センターは、その後、「持続可能な発展のためのジェンダーセンター」（以後、「ジェンダーセンター」と略す）と名前を変えていた。そして、ウランバートル市の西の端に位置するソンギノハイルハン区第３ホローのゲル地区を活動拠点とし、貧困家庭の栄養改善問題に取り組んでいた。

私は、その頃、同区第１ホローで、地方から移住してきた元遊牧民の生活調査を行い、特に子どもがくる病を発症した家族のライフヒストリーの聞き取りをしていた[2)]。ウランバートルの西の端に位置するゲル地区は、最近移住した人が多く、家を探しあてるのが非常に困難である。隣り同士住んでいてもお互いに名前すら知らないことが珍しくない。この第３ホローも、移住者が多く住む地域である。コミュニティのないゲル地区でどのような活動が可能なのか。ますます、「ジェンダー

図１　ウランバートル市ソンギノハイルハン区



センター」と第３ホローに興味をもった。

代表のＴ．アムガランに聞いてみると、「ジェンダーセンター」は、地域住民が政治に参加する民主的なシステムをどのように作るか、というテーマをもっていた。第３ホローは、ウランバートル市内の末端の行政単位で、女性が初めてホロー長に選出された地域であった。「ジェンダーセンター」は、1995年から第３ホロー長と話し合いを重ね、移住者や貧困者など、社会的弱者が参加できる住民組織を作り、住民が政治に参加する取り組みを進めていた。

私はバヤンホンゴル県ボグド郡ツェルゲルの遊牧社会で、遊牧民主体の協同組合の設立と崩壊、そしてその後の分断された状況を見つめてきた。その問題関心から、ウランバートルの西の端、移住者と貧困者の多い地域に生まれた住民の自治組織についてますます興味をもつようになった。

ジェンダーセンターによると、2005年の第３ホローの概要は、面積が32.5ha、人口11,120人、2,137戸。65％が生活最低水準以下で暮らしている。一家族の平均収入は33,000トゥグルクである。第10ヘセックの奥にあるゴミの山の中でホームレスの約100戸が暮らしている。７戸に１戸の割合でくる病にかかっている子どもと障害者がいる。20戸に１戸という割合で、家族の誰かが外国で働いている。[3)]

第３ホローに移住者が多いのは『オラーン・チョロート』というゴミ捨て場があるからだ。仕事に就けない人々の生活の糧となっている。ゴミ捨て場の中には、小さなゲルやゴミを積み上げて作った囲いなどの住居がある。家族で住んでいるケースもあれば、仲間を作って暮らすケース、大人と子どもが家族のように暮らすケースもある。また、ゴミ捨て場の近くにハシャーを立て、ゴミ収集車を招きいれる家もある。「ジェンダーセンター」がここで活動するまでは、こうして暮らす家も多く、ゴミを分別した後、売れないものは、すぐ近くの溝に捨てる家が多かった。しかし、貧しくても、清潔に、人間らしく暮らしていこうという「ジェンダーセンター」の呼びかけに、人々の意識も変わっていったという。

市場経済に入ってすぐ、ジュースやシャンプーなどのテレビコマーシャルから始まり、ウランバートル市民も大量浪費のシステムに組み込まれるようになった。ゴミの山は、市場経済化とともに大きくなっている。また、格差社会の競争に負

写真１　第３ホローの奥にあるゴミ捨て場

けた人たちは、このゴミで暮らしている。オラーンチョロートは、市場経済化の象徴である。ＮＧＯ「ジェンダーセンター」の活動は、この底辺の住民とともにあることが、特徴的である。

（2）第３ホローの住民運動の特徴

第３ホローの住民運動の特徴を４つあげたい。

①10人のヘセック長と67人のゴダムジ長の機動性

本来、ホロー役場で働くのは、ホロー長、事務長、ソーシャルワーカーの３人である。しかし、これでは、１万人を越える住民に充分な行政サービスを行うことはできない。それで、ホロー内の最小の行政組織ヘセック（ブロック）の長10人に加え、新たに行政組織としてゴダムジ（ストリート）を組織し、ゴダムジ長67人の長を選出することにした。

ゴダムジ長は、セミナーを受講し、行政の末端の仕事を担当するが、無給のボランティアである。ヘセック長とゴダムジ長は自分の担当地域を毎日歩く。昼間は家庭訪問し、回覧板をまわしたり、家庭の事情を聞いたり、必要な情報や助言を与えたりする。ゴミ捨て場を抱える第10ヘセックでは、そこで暮らす人々とのコミュニケーションもはかっている。また、夜は路地の見回り（エルグール）をする。家に帰らない子どもがいたら、注意したり、家に連れて行ったりする。酔いつぶれている人がいたら、ホローの警察に保護を求める。

また、毎月の酒類やたばこの販売が禁止される日には、商店を回り、店頭から撤去する。ゴミの山から買い物袋などが飛んでくるので、毎月ゴダムジの清掃を組織している。

2006年に、筆者が第10ヘセック長だった家にホームステイした時のことである。ヘセック長だった女性についてストリートを歩くと、ヘセック長はすれ違う人と必ず立ち止まって挨拶をし、情報交換をしていた。田舎で、遊牧民が、放牧の途中、人を見かけると、馬から降りて座り、たばこを組みかわし、「ソニン　サイハン　ヨー　バイナ　ウェー」とおしゃべりを始めるが、これと同じシーンである。また、無料健康診断の日程を知らせるために、家から家へ、訪ねて行く時も、ミルクなしのお茶をすすって、「ソニン　サイハン　ヨー　バイナ　ウェー」と、しばらくお互いのことを話し込む。これも、田舎では、放牧の途中で、ゲルを見かけたらかならず立ち寄って、情報交換するのと同じシーンである。遊牧社会の伝統的な

図３　ウランバートル市内の行政区画

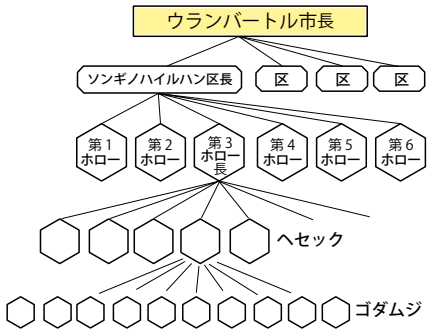
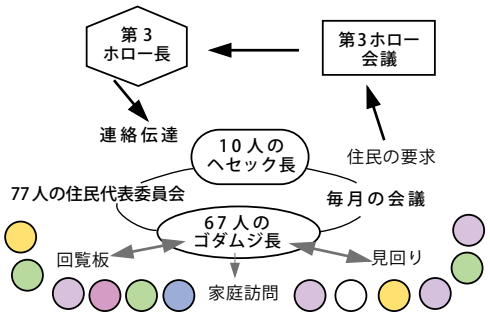


図４　第３ホローの行政組織と住民運動



情報交換と共同体意識が、ここで無理なく再生している。ヘセック長だった女性は、まったく、気負うことなく、楽しみながら、ストリートを歩いていた。

また、ストリートを歩いていると、子どもが自分の家に来るように呼びに来た。その家を訪ねると、ハシャーの中のゲルの戸口の日当たりのいいところに、目の悪い老人が座っていた。ここにいて、ゴダムジを行き交う人を感じ、話したい時は子どもを使いにやるのである。筆者とヘセック長はしゃべりながら歩いていたので、何か変なモンゴル語をしゃべる人が来たと興味をもったらしい。ヘセック長は、ミルクなしのお茶をすすりながら、無料健康診断の説明をし、子どもに予約を受け付ける日時と場所も伝えていた。

このようにヘセック長やゴダムジ長が、住民に必要な情報を与えるために担当地域を歩きまわることで、社会的弱者に確実に情報が届き、また、弱者自身が、身近に情報を得ることができるようになっている。官僚主義の下にあった行政サービスが、民主化されているのである。

②「私たちのホロー・私の家」住民大会

この10人のヘセック長と67人のゴダムジ長、あわせて77人の住民代表は、住民の状況を把握し、毎月第一週目の水曜日に集まり、住民が抱える問題を話し合っている。会議でまとめた住民の要求をホロー議会に申し入れるのはもちろん、区、市、また国から議員や行政官が第３ホローを訪ねた時にいつでも伝えられるようにしている。

そして、２年に１度、「私たちのホロー・私の家」という名前の住民大会を開催することとしている。

2005年12月には、初めての大会が開かれた。この会議には、170人の住民、ホロー役場、ホローの病院、ホローの警察、ウランバートル市粗大ゴミ研究センター、第65学校、第80幼稚園、公衆浴場、ジェンダーセンターが参加した。

この時、健康、教育、環境、家庭問題、母子の健康について、医師や教師らから報告があった以外にも、住民から次のような発言があった。就職の機会が不足していること、貧困問題が深刻化していること、アルコール中毒問題が家庭や地域社会に悪影響を与えていること、電化が遅れているため街灯が少ないこと、青少年のために夜間の酒類販売をやめること、新しい移住者が集中する地域にはまだ住所番地がないこと、土地の私有化手続きが遅れていること、ホローが広いので医療サービスが充分に届かないことなど。

また、住民から次のような提案があった。溶接や縫製の技術をもっている住民は、子ども達に教えて、手に職をつけるきっかけにしてはどうか、ヘセック長やゴダムジ長はみんなのために毎日歩きまわるので、靴を買ってあげてほしい、という提案が出されたり、中学生が「信頼・ハート・知恵をあわせましょう」と、ホロー内の問題をみんなの力で解決していこうと呼びかけがあった。

ここで議論されたことが、翌年の活動目標となっていく。

実際に行なわれたことは、家庭内暴力の予防のためのＤＶやアル中予防セミナー、ゴミ問題の理解を深めるためのダイオキシンセミナーの開催。子ども向けの性教育やドロップアウトした子どもの特別授業、子どもたちの絵画コンテスト。老人のチェス大会やピクニックの企画も好評だ。２ヶ月に１回のフリーマーケットでは、ゴミ捨て場で暮らす人々とコミュニケーションをはかってきた。ホームレスの人々のために、政府に対しゲルを申請し、ゲル地区で住めるようにしたり、外国の支援団体に車椅子を要請し、障害者に提供したり、ホロー内に住んでいる23家族のカザフ族を孤立させないために、カザフ文化を知る「カザフの日」を開催し、交流を深めたり、様々な活動で展開されてきた。

第３ホローの住民運動の特徴は、10人のヘセッ

ク長の内９人、67人のゴダムジ長の８割が女性だということである。この女性たちは、社会主義の時代に教師の経験をしていたり、障害児童の親の会の活動をしていたり、今は、仕事に就いていないが、以前は社会に貢献する活動を経験した人が多い。彼らは必ずしも経済的にゆとりがあるわけではない。子どもや年配者、ホームレス、マイノリティーなどの社会的弱者を捨て置かない運動の原動力となっている。

③ 活動拠点のゲル、公衆衛生＆教育センター

2004年９月にイタリア人医師アルドがゲルを第３ホローに寄付し、ホロー役場の前に設置された。このモンゴルの伝統的なゲルは、情報センター、住民運動の事務局、公衆衛生と教育センター、国際交流のセンターなど、多機能な役割を果たしている。

ゲルの入り口には掲示板があり、無料健康診断の日程など住民にとって必要な情報が掲示されている。ゲルの中のハナ（壁）には、地方から移住してきた住民がウランバートルで暮らすために必要な情報（学校や病院などの公共施設の位置やバスの路線と料金）が掲示されている。本棚には国際機関や政府の発行した教育や医療に関するパンフレットや書物が並んでいる。

10人のヘセック長と67人のゴダムジ長らにとっては、このゲルは作戦本部である。日常的にここに集まり、情報交換している。ホロー役場に用事のある人が、まず、「ホロー長はいるのか？」とここに立ち寄り、おしゃべりをして、情報収集していく。「ジェンダーセンター」のカウンセラーと住民から選ばれた職員が常駐しているので、ＤＶの被害者が相談に来たり、体調の悪い人が血圧測定に来たり、医者に見せるために自分の血圧カードを取りに来たり、いつも人でにぎわっている。外にも花壇を作り、その中に雨よけをつけた丸テーブルとイスを置いているので、ゲルの中がいっぱいになると「オープンカフェ」に移動して話を続けている。

私が、第１ホローの調査をしていた時、ホロー役場は移住手続きに来た人の行列で中に入ることが困難で、長時間待たされた人の疲れた顔が思い出される。第３ホローの役場の前にあるゲルのこのセンターは、地域コミュニティーの重要な拠点となっている。

また、子どもたちも、放課後、本を読みにここにやってくる。住民がドロップアウトした子どもに読み書きを教えるのもここだ。しかし、子どもが静かに本を読むには手狭になってきたので、ホローは役場の横の部屋を子どもの図書館として利用することを許可した。

写真２　正面の天幕が公衆衛生＆教育センター、右がホロー役場

この他、このゲルは国際交流の場として役立っている。2006年、日本福祉大ＣＯＥ調査[4)]が第３ホローで行われた時、地元スタッフとの会議を重ねたり、この調査にともなってホームステイをする大阪外大の学生を歓迎し、地元小学生が音楽会を開いてくれたり、ホストファミリーとの対面式を行なったりしたのも、このゲルであった。

2007年夏、大阪外大でモンゴル語を学び、日本語教師の資格をもつ４年生の川崎未来さんとモンゴル国立大学でモンゴル語と日本語を専攻するＴ.エネビシさんが、２ヶ月間、日本語教室を開き、受講生の子どもから大人まで、このゲルに通った。その後も、エネビシさんが授業を続けている。

公衆衛生＆教育センターは、ゲルが持つ出入り自由な開放性が充分に活かされ、人が集まり、交流し、人材が育っていく拠点となっている。

④ シングルマザーの自律のためのグリーンホロー計画

2007年、「公衆衛生＆教育センター」の名前は「町おこしセンター」に改名された。このゲルは、サービスを受けに来るだけでなく、何かを作り出し、経済的に自律しようとする人たちが集まる拠点になりつつある。

市場経済移行後、様々な理由で、一人で子どもを育てなければならなくなった女性は、働く意欲があるにもかかわらず、年齢や育児を口実に就職の機会を奪われ、苦しい生活を余儀なくされている。ゴミを拾う生活から抜け出せないシングルマザーも多い、そこで、住民会議と「ジェンダーセンター」は、2007年度に新しく「グリーンホロー計画」に着手した。

まず、シングルマザーの中から植物を育てることに興味ある人を募った。ヘセック毎に１人、ホロー全体で10人のシングルマザーが選ばれ、グリーンホロー計画の中核となった。

この10家族は協力して、それぞれの家の柵の修理やトイレの設置など生活改善に取り組んだ。そして、チャツァルガナやウフリン・ヌドゥなどの果実のなる木、キュウリやじゃがいもなどの野菜を植え、情報と経験を交換した。この経験は、次年度からそれぞれのヘセック内で伝えていく任務を負っている。こうして、人材育成とネットワークの拡大を進めて、３年間で300戸以上の家に果実のなる木や野菜を植えることを目標としている。ウランバートルの西のはずれのゴミ捨て場を抱える貧困地域で、自分のハシャーの中の暮らしを緑豊かにすることで、ホロー全体を美しくすると同時に、ウランバートルの大気汚染を緩和し、CO2削減に貢献しようと、シングルマザーたちは積極的に取り組んでいる。

写真３　野菜用のビニールハウスをシングルマザーの家庭に立てている

写真４　手工芸のグループの誕生

今年はみんなで60キロのきゅうりを収穫し、40キロは瓶詰めなどにして販売した。あるシングルマザーは、農作物を作るのは初めてだけれども、育っていく姿を見るのは毎日の楽しみになった、という。またある女性は、これまで人が訪ねて来ても出すものがなくて気まずかったが、今は、庭のきゅうりをもいで、切って出すと、話もはずんで楽しい、という。

来客を自分が育てた家畜の乳製品や肉製品でもてなすのは、遊牧民の伝統である。都会のアパートで暮らしていても、まず、お茶とお菓子の盛皿で来客をもてなすのがしきたりである。しかし、ミルクも、お茶も、菓子も、生活水準以下で暮らす人々にとっては、常時ストックしておくわけにはいかない。しかし、このグリーンホロー計画で、家畜から離れた都市住民が、ハシャーの中の土地に手を加えて、食料を手に入れることを覚えた。手ずから得る喜び、作る誇り、収穫物を分かち合う楽しみを取り戻している。

また、このシングルマザーの中から手先の器用な女性が、フェルトなどの工芸品を作り、手工芸のサークルが生まれた。ひとところに集まって、作品を作り、教えあう。その合間に自分や子どもの話、近所の話、おしゃべりが楽しい。社会主義の時代、「羊毛は金」と呼ばれ、ソ連東欧へ輸出する重要な原材料として、遊牧民は厳しい国家調達のノルマを課された。今、この第３ホローのシングルマザーにとって、「羊毛は手の喜び」となり、生活を潤している。

（3）まとめ

ＮＧＯとホローが仕掛けを作った第３ホローの住民運動は、最初、行政のボランティアサポーターを組織し、ゴダムジ長がゲル地区を歩き、弱者に必要な情報を届け、要望を上へ押し上げ、社会サービスを向上させる役割を果たしていた。そして、住民の要求は、住民が力をあわせ、行政と外国の支援者の支援をえて、１つずつ実現していった。さらに、現在は、社会的弱者であるシングルマザーを支援して自律生活に導く段階にある。シングルマザーは、ハシャーの中の土地を耕して食料を得て、畜産物の加工をして現金収入を得て、貧困を克服する道を歩んでいる。

この住民運動に触発され、ゼミの卒業生も動き出した。能勢高校に勤めた卒業生は、モンゴルや第３ホローについて生徒が学んだことを文化祭で展示し、スーテイ茶のお店を開き、手工芸品を

売り、その収益をシングルマザーに届けた。第３ホローを訪問した学生と箕面市民が「ジェンダーセンター大阪」というＮＧＯを立ち上げ、グリーンホロー計画を紹介するために大学祭に出店したり、研究会や卒論の発表会でワークショップを開いたりしている。収益は数万円単位のわずかな金額であるが、モンゴルに渡ると原材料を買う資金となり、シングルマザーが手工芸のサークルに通う励みになっている。「支援する」側も、それをきっかけに、バラバラになったコミュニティーの再形成を模索し、また、都市消費社会における自律的な暮らしについて考え始めている。

この第３ホローの住民運動は、観察するだけでなく、協同する段階になった。だから客観的に報告することは難しい。むしろ、多くの人に興味をもってもらい、アドバイスをいただけたらと思っている。

註

1）今岡良子「モンゴル国における女性研究の動向と研究紹介」、アジア現代女性史研究会編（2005）「アジア現代女性史」1号、p.p.1-13

2）今岡良子「移住家族の生活困難、乳幼児の発育障害と移住」、長沢孝司、今岡良子、島崎美代子編（2007）『モンゴルのストリートチルドレン　市場経済化の嵐を生きる家族と子どもたち』、朱鷺書房、p.p.138-160

3）Gender center for sustainable development, ‘Medeelliin khuudas’,No.3/37,2005 oni 12 sar

4）日本福祉大学ＣＯＥ事業「福祉社会開発の政策科学形成へのアジア的拠点」プログラム「モンゴル国における障害児・者とその家族における実証的研究」

（いまおか　りょうこ）